未遂

山脇正邦

戸板にのせられた弥助の死骸が、朽ちかかった暗い彼の家に運び込まれたのは、真っ赤に焼けた夕陽が西の山なみに沈もうとする暮れ方のことであった。荒れにまかせて、いまは稲穂の影さえとどめぬ田畑の道を、力なく、のろのろと歩むその戸板の群れにも、残照はかっと覆いかかり、むなしく天空を睨んだ弥助の形相をも赤く染めていた。途上、たれも口をきこうとはしなかった。口に出す言葉ひとつなく、ただ沈黙のみがそこにあった。寿介、甚作、お兼、太平、お雪と、そうした近隣の数少ない百姓たちに戸板の端を支えられて、弥助の姿は崩れ落ちた壁のようにうつろな存在に見えた。形相こそ悲惨であったが、いまはあまりにも無気力なぼろ切れのようでもあった。

悲惨な表情は、戸板を囲む百姓にもうかがわれた。深い悲しみの表情は凍りついたように動かなかった。たれの眼にも涙はなかった。戸板の群れに一人離れて、とぼとぼとあとに続く弥助の女房のお園にしてもそれを見ることは出来ないのであった。お園はまるで惰性のようにのろのろと歩き、その瞳は遠く夕映えの残る山なみをぼんやりと眺めていた。まるで魂を抜かれた人形のように、ふらふらと人々のあとに続いて歩いた。たしかにその時、お園は幻影を見ていたのだった。夕陽が沈むにつれて、次第にぶよぶよとした人間の血の色になっていく夕映えのなかに、お園は、苦しみに耐えきれず、あがきにあがいて、はかなく一刀のもとに斬り捨てられた弥助の無念の声をはっきりと聞いていたのだった。うつろに開くお園の眼に、その幻影は浮かんでは消え、また浮かんでいた。思いは弥助の父親である弥兵衛の場合にもおなじであった。戸板が家のなかに運び込まれた時、弥兵衛はほとんど無感動な表情でそれを見ていた。暗く、湿って傾いた家の土間の一隅に弥兵衛はじっとうずくまるように坐っていたのである。

戸板は土間に置かれる時、予想も出来ぬほどの重いずっしりとした音をたてた。日頃から食うものもままならぬ百姓にしてみれば、弥助が斬り殺された丸太橋堤からここまでの

距離はかなりの苦痛を伴った道中だった。ずしりと音をたてた途端に、いままで残照に赤く染まっていた弥助の頬からすっと血の気が引いたようであった。

薄暗がりの土間で、弥助の顔は青く黒ずんだ色となった。ただ、ざくろのように斬り開かれた左の肩口から脇腹にかけての刀傷が不気味なほどに赤かった。それはぱっくりと大きな口をあけていた。

弥兵衛はその傷跡を静かに見つめていた。

「・・・なんとも」

隣に住む寿介が白髪頭をふりふり弥兵衛に言った。弥兵衛はその言葉にこたえようとした。しかしそれは弥兵衛の表情を醜く歪めただけであった。

たれもその場を離れようとする者はいなかった。静寂が土間を覆った。それは息苦しいほどの静寂だった。隣人たちは己が身に、弥助の無念と無残さを感じて身を震わせた。

しかしその静けさはそんなに長くは続かなかった。隣人たちは、腹の底からしぼり出すようなうめき声を、静寂を打ち破るお園の慟哭を、耳に聞いたのであった。

隣人たちの戸板に遅れて土間の入り口に着いたお園は、この時初めて弥助の死骸を直視した。はっきりとした悲しみはなかった。はっきりとした嘆きも生じなかった。しかしいつしかお園の眼にはみるまに涙が溢れ、慟哭が口をついて洩れた。お園の慟哭は絶叫に似た。お園は駆け寄るようにして弥助の死骸にすがってその頬を押しつけた。弥助の頬は氷のように冷たかった。それをお園は自分の温かみで温めようとした。髪が乱れ、着物の裾も乱れた。お園の涙は弥助の肩口の傷跡に溶けた。隣人たちの耳にはお園の叫びがつんざくように響いた。

「だから、だから、おらぁあれだけ止めたんだぞ。おらぁ、おらぁ・・・」

お園は弥助の死骸をかき抱いた。木綿のくたびれた野良着の衿元に手をさし入れてしっかりと弥助のからだをつかまえようとした。それはそのまま愛撫のしぐさであった。お園の叫びが土間に満ちてはけ口を失ったかのように響いた。隣人たちはそれを押し黙って見ているだけであった。弥兵衛もなだめようとはしなかった。悪夢を見ているような光景だった。倅の弥助の死骸がお園の手に抱かれているという現実すら、なにか自分とは別の、まるで関係のない世界のことのようで、奇妙なほどに白々しいものに見えた。

西の山に陽はすでに没して、にわかに寒々しい暮色が暗黒の世界に変わりつつあった。

暗い土間のなかで隣人たちはじっと立ちすくんでいた。まるでいまにもかき消されるかとも思えるはかない影のようだった。

お園のうめきとうごめきがそこにあっては生きている唯一のものであった。隣人たちは肩をふるわし弥助の死骸にとりすがるお園の姿をただ見ているだけであった。

重々しく空気が沈滞した。

「いくら嘆いても、弥助は生きて帰ってこんのじゃ」

寿介がぽつりと、自分に言い聞かせるように呟いて、乱れたお園の着物を通してその肩の上に手を置いた。

陸中国猪頭郡全般にその勢力を持ち采配をふるった、時の代官鈴木仙右衛門が郡東北部に位置する大東村出張屋敷改築の令を発したのは、明和六年如月五日のことである。この改築工事を終えたのが同年菊月七日のことであるから、大東村村民を総動員したこの工事はおおむね七ヶ月を要する大規模なものであった。代官鈴木仙右衛門は、同月二十日工事完成を視察するため来村、二十四日離村する手筈になっており、村民一同はこぞって歓迎し恭順の意を表するよう名主本庄仁兵衛は通達を村民一人残らずに徹底して出していた。

事件が起こったのは二十二日夜半のことであった。翌二十三日午の刻、名主本庄仁兵衛は、「甚だ遺憾の儀此れ有り。依って即刻当屋敷へ罷り越すよう」との厳命を受けていたのであった。

明和年間といえば、八代将軍徳川吉宗の死後、享保の改革の成果はあとかたもなく崩壊し、武士階級の綱紀著しく乱れ、汚職収賄にあけくれた十代家冶のもと、世に田沼時代といわれた時代である。現実に適応し著しく成長してきた商業資本と妥協し、これを充分活用し利用しようともくろんだ老中田沼意次の意図は甚だしい汚職収賄の混乱を引き起こすこととなった。汚職により己の財を増やすことに血なまこになる幕府要人、農民への相次ぐ租税増、酒、煙草はいうに及ばず足袋、雨具使用にいたるまでの細かい干渉、搾取に次ぐ搾取、これらのものは弱い立場に置かれた農民を日に日に悲惨にし、更に転落へと追いやった。加えて天災は時を選ばず襲ってきては、田畑の上に採れる食物のかけらもなく冷たい風が吹き荒れた。荒涼たる田畑に農民は涙した。いやその涙さえも枯れ果てて、日夜茫然と田畑を眺めるだけであった。

明和六年、東北一帯に恐ろしい飢饉の嵐が吹き荒れた。それにもかかわらず、幕府役人の搾取はその手綱をゆるめようとはせず、いやそれ以上に引き締めようとの気合に満ちた。こうした圧制に抵抗し反逆しようとする農民の叫びもないことはなかった。各地に農民は蜂起した。しかし力無きがゆえにこうした百姓一揆もむなしく幕府の手によって崩され消

え去っていったのであった。この年、老中田沼意次は全国にわたって農民強訴、徒党強訴取締の令を厳しく発していたのであった。

農民に対する幕府役人、代官の言い草はいつも同じであった。

「百姓の苦しみはわかる。しかしいまこそ耐えねばならぬ。われわれとても同様苦しいのだ。更なる倹約と節制と勤労が必要である。必ずみんなが潤える時代が来るから」

しかし農民は知っていたのである。代官の生活が次第次第に贅沢なものになっていくのを。甘い汁は幕府役人のもとにあってうず高く蓄財されていくのを。身のまわりを見渡せば、搾取の当面の敵は代官であることを。

代官鈴木仙右衛門の屋敷内は、その時ただならぬけはいが感じられた。じっと沙汰を待ち続けた名主本庄仁兵衛はただ狼狽するばかりであった。荒々しい怒声を込めて、鈴木仙右衛門側近宮川藤内がまるで阿修羅にも似た面貌を仁兵衛の前に現わしたのは一刻ばかり経ってからのことであった。それまで代官鈴木仙右衛門と対座していたに違いない藤内は汗を額にてかてかと光らせていた。汗は代官の前で充分に絞り出されたものに違いなかった。

藤内は控えた仁兵衛の姿を見るなり、

「不敬じゃ」

と吐き捨てるように言った。

代官屋敷内で仁兵衛が宮川藤内から噛みつくような激しい口調で聞かされたことは次のような驚くべき事実であった。

「昨夜二十二日亥の刻のことである。当屋敷滞在中の代官鈴木仙右衛門殿はいささかの御酒を夕餉時にきこしめされ、酔い覚ましも兼ねて当村丸太橋付近を散策されしところ、突如として暗闇のなかから飛び出だしたる百姓らしき刺客の襲来をうけられた。手に鎌を持ってなにやら叫びながら盲滅法に振り回す暴漢の姿を百姓であることを冷静に確かめられた後、代官殿は不敬の罪をもって一刀両断に斬り捨てられた。名を確かめたところ当村の弥助と称する百姓であることを告白し息絶えた。当然武芸秀でし代官殿にはかすり傷ひとつなきものの、分際を心得ぬ不敬の所業は遺憾極まりない。弥助一族並びに治安に怠りあった名主本庄仁兵衛の責は重大であり厳罰は断じて免れ得ないものと心得えよ。謹慎のうえ追っての沙汰を待つように」

仁兵衛は藤内の赤ら顔に比べて自分の顔から次第に血の気が引いていくのを覚えた。膝が無性にがくがく震えて止まらず、藤内の顔が二重にも三重にも見えた。周章狼狽した仁

兵衛は藤内の最後の通告を聞き終えると同時にがっくりと肩を落した。足音も荒々しく藤内が去ってからも、仁兵衛は伏せた面をあげようともせず、化石のようになってじっと長い時間を過ごした。夕陽がもはや障子に射し込んで、仁兵衛の影を畳に長く映し出していた。

「大変なことが・・・。大変なことが・・・」

仁兵衛はたれに言うともなく歯軋りをかんだ。

戸外では風が吹き始めていた。

土間の中央に弥助の死骸がぼろ布一切れかぶせられることもなくあらわに置かれてあった。死骸は硬直してもはやそれは人間の死骸であることをも拒否している、ある一個の物体でしかなかった。ただ先程までと違っていたことは両の掌が静かに胸の上に組まれていることであった。その光景はまるで霊気が立ちのぼるかとも思われた。

名主仁兵衛が持ってきた油に灯が点じられて、薄暗がりのなかに弥兵衛、お園に加え、寿介、甚作など先程からその場を去ろうともしなかった隣人たちの顔が鈍く浮かび出ていた。悲痛な面持ちで人々はそこにいた。

通夜というのではなかった。そのような形式も余裕ももはや百姓の生活のなかからは姿を消していたのである。事件の現場であった丸太橋堤から戸板をともに運んできて、ついそこに全員が居残ったというのがみんなの本音であった。

夜風に戸がほとほとと鳴るのにさえ名主仁兵衛は怯えた。仁兵衛にとってはいまはすべてのものが戦慄のたねであった。ほとほとと鳴るその音さえもが、代官屋敷からのお触れの戸を叩く音に聞こえたのであった。

「どうにも困ったことだぞ。どうにも・・・」

代官屋敷での一切を村民に語り終えると、一夜にどっと増えた白髪を左右に振りながら低い声で仁兵衛は言った。当年とって五十八歳、われながらよく生きたと思う。小柄ではあったが芯が強く代官もお気に入りであったし、村民からの信望もそこそこあったのだ。これまでこんなに冷たく代官屋敷であしらわれたことはなかった。顔は歪み眼の力がまったく消えうせていた。

「愚かしいことだで。お上に楯突きゃあ、それっきりになることなんぞ目に見えたことだで」

甚作が弥助の死骸を気にしつつ言った。太く黒い眉が浅黒い面貌を猛々しい男に仕立て

ていた。中年の脂ぎった額は小さくいじけた百姓たちの間にあっては異例な感じで、太く響く声もまた異例であった。事実この男は村のなかにあっては名主の歓心を集めている存在であった。

油の灯がじりじりと音をたてた。

「おら、いつかはきっとこういうことが起こると思っていただ」

しわがれ声はお兼の声であった。深い皺が額に刻まれて年経た女を思わせた。中年ではあったがいつしかそれは老婆の姿であった。片目眇めの面貌が不気味であった。

「弥助はずっと前から妙なことばかり言っていただ。二年前じゃ。弥助がちょうど三十になった時からだ。なにか物にとり憑かれたもののようだった。代官様だって、おらたち百姓だって同じ人間には変わりはねえ。それがなんでこんなにまで、おらたちは食うものも食えねえで働かにゃならねえのか。そんなことを言っていただ。贅沢三昧していなさる代官様が憎いってな。こんどのお屋敷の改築にしたって、喜びなさるのは代官様や周囲のご家来衆で、おらたちはただ働かされるだけのことだって・・・」

「そりゃ身分ちゅうもんだぞ。仕様のないことだぞ、そりゃ」

人々はこの時、名主仁兵衛の眉がぴくりと動くのを見逃さなかったのである。わざと大声で話の腰を折ろうとした甚作の声は、むしろ仁兵衛一人に向かって発せられていた。

「そうだ。生れの違えつうもんだ。そりゃ、おらだって黙って聞いていたわけじゃねえ。どうにもならねえことだぞって口をすっぱくして言って聞かせたもんだ。それでも弥助はなにやら遠くの方を見つめながら、いつかいつかって言っていただ」

お兼はいつしか弥助を非難する眼つきになっていた。

お園は放心した人のようであった。泣きつかれてその瞳の焦点は薄汚れた天井の闇のなかに消えていた。

「こんなことが起こらなければいいがってそればっかりを思っていただ。お屋敷の完成の時はいつかとか、いつ代官様はお出でになるんじゃろうとか。そんなことを口癖のように弥助が言っていたのは、本当に代官様をどうにかする腹だったんだ。やめろ、短気を起こすなっておらは言ったどもなあ。それにしてもとんでもねえ、恐ろしいことを・・・」

お兼はわざと大きく身を震わせた。

名主仁兵衛はその姿をいまわしいものを見るかのように睨みつけた。そして口調はいままでと打って変わって猛々しく叫ぶように言っていた。

「なんで、なんでそれを、もっと早くおらに言わなかっただ。そうすりゃこんなことは起

こらなかったんだぞ。たわけめ。たわけめ。おらなら弥助を止めることは出来ただ」
「いまさらなんと言って見てもはじまらぬことじゃ。弥助は生きて帰らんのじゃ」
じっと話を聞いていた長老の寿介がたれにも聞きとれぬかのような低い声で、ぽつりといったのはその時であった。
「だども、弥助さん、可哀想だのう」
これまで土間の隅で身を固くして弥助の死骸に息をひそめて見入っていた十六歳になったばかりのお雪が、気兼ねするかのように怯えた声で言った。娘とはいえ日ごとの過労にかさかさに渇いた指先であった。
「おらが弥助さんを見つけたのは明け方だった。弥助さんはうつぶせになって手に鎌を握りしめて倒れていただ。柳の木の根元のところで。弥助さんは親切だった。おら難しいことはわからないけども、なんだか弥助さんが可哀想だ」
「よけいなことは言うでねえ」
母親のお兼が仁兵衛の顔を窺うように見てお雪をたしなめた。
「そうだ、子供は喋っちゃならねえ」
甚作も大きな声を出した。
「だども、だどもおらも弥助さんの気持はわかるような気がするだ」
若い血気盛んな声は太平の声と知れた。血が一気に頭に昇ったような熱っぽい口調であった。太平はお雪に惚れていた。言葉が勝手に口に出た。恋の発作。たしかにそれは発作に違いなかった。
「弥助さんはいい人だった。おらには弥助さんの気持がわかるような気がするだ。いくら働いても働いても出来た米や麦はすべて年貢だ。馬か牛のように毎日働くだけ働いても百姓はみんな飢え死にしかねえ。おら弥助さんを犬死させたくねえ。みんな揃って代官様に嘆願するなり強訴するなりしなくちゃなんねえ。代官屋敷へ揃って・・・」
「たわけたことを言うな、若造」
仁兵衛が堪りかねて怒鳴った。眼の中に赤い血管が浮き出し、顔はどす黒く、からだはぶるぶると震えていた。太平は夢からさめたようにしょげた。
「たわけめ」
甚作がきめつけるように言った。
「そんな恐ろしいことが代官様に聞こえてみろ、打ち首だぞ」
お兼も加勢して言った。

太平はお雪の方を見てべそをかいた。
「ほんとだぞ。もう二度と弥助の二の舞をするもんでねえ。ほんにたわけじゃ。自分ひとりのことで済んだと思って、実際、迷惑はあとに残る・・・」
ここまで言って仁兵衛はふと恐怖におそわれたように首に手をやった。代官屋敷のことが脳裏を掠めた。厳罰。追っての沙汰。仁兵衛は改めて愕然とした。冷たい風がからだのなかを吹き抜けるようであった。怒りで、弥助の死骸に唾を吐きかけてやりたい衝動が心のなかに湧き立った。
「ほんにそうじゃ。たわけたことだで、なぁ、弥兵衛さん」
甚作が言った。化石のようにじっと黙っていた弥兵衛の表情に一瞬当惑の色が浮かんだ。弥兵衛はそれでも仕方なげにかすかに頭を縦に振った。
枯れた涙の眼をきっとあげて、お園が弥兵衛を直視したのはこの時であった。鋭い光が瞳にひそんだ。時間が停止した。
外の風が一層強まった。夜半に近い刻限で静けさのなかに聞こえるのは風の音ばかりであった。
「おとう」
低いがしかしはっきりとした声でお園は弥兵衛に言った。
弥兵衛はふと顔をあげて思わずはっとした。ただならぬものがお園の眼に見えたからである。隣人たちも口をつぐんでふたりを見つめた。重い沈黙であった。長い時間が感じられた。
「おとうもそう思うだか。この人のやったことがたわけに見えるだか。親であるおとうまでもそう思うだか」
弥兵衛はお園の顔をじっと哀しげに見つめた。
お園もじっと見返した。そうしたままふたりはしばらく動かなかった。
ふたりの間の緊張が破れた時、お園は音もなく立ちあがった。魂のない人のようにふらふらと戸口に向かった。
「どこへ行くのじゃ」
寿介が言った。
「おら、この人が不憫だ。おら、この人のあとを追って死んでやるだ。死ぬだ・・・」
お園は狂った人のように戸口から外へ出た。そしてまるで影のように外の暗闇に消えた。人々はあっけにとられてそれを見ているだけであった。あまりに瞬時の出来事だけに、制

止するものはたれもいなかった。
開かれた戸口から、夜気をずっしりと含んだ冷たい風が一陣さっと土間に向かって吹き込んだ。

弥兵衛は歩いていた。夜霧が足元にからんで歩調が乱れた。あたりは闇であった。星ひとつ無い暗い空に風が鳴っていた。
いつ自分が家を出たのかわからなかった。お園が出てから、口々に騒ぎたてる隣人たちをあとにしていつしか弥兵衛は戸外に出ていた。夜ともなるとさすがに寒さが増した。茫漠とした思念のなかに弥兵衛はお園の瞳に光るものを思い浮かべていた。
みんな自分勝手なことばかり言っているだ。自分たちの本当の苦しみをどうしてもっと言葉に出さないのだ。なににそんなに気兼ねしているだ。あんまりだ、あんまりだ。おら、この人が可哀想だ。おら、このひとが不憫だ。甚作さんも、お兼さんも言いたい放題だ。名主さんの顔色ばっかり見ているだ。太平もお雪も、そしておとうも、みんなこの人のことなんか少しも本当に考えていないんだ。たわけだとか愚かだとか言って、自分勝手なことばかり言っているだ。この人が、弥助さんが不憫だ。不憫だ。
弥兵衛はお園の瞳にその声を聞いたと思った。
冷たい風が弥兵衛の白い髪のほつれをなぶって過ぎた。弥兵衛の足は丸太橋に向いていた。お園を探そうと思ったのであった。
田畑の道は遠くかすんで続いていた。雑草が弥兵衛の裾を濡らしていた。
悲しみという言葉では言い尽くすことが出来ない心境であった。胸を覆っている思念は荒涼とした荒野に似ていた。
弥兵衛はじっと遠い闇を見つめて黙々として歩き続けた。闇のなかに、弥兵衛は倅の弥助の鬼気迫る形相を見た。必死に構えた鎌の先がぶるぶると震えるのを見た。昨夜、弥助はこの道をもっとすさんだ気持で歩いたのだ。冷たい風を真正面に受けて弥助は歩いていたのだ。弥助は歩いていたのだ。
そして、飄々と鳴る木枯しに似た風の音のなかに、弥兵衛は弥助の断末魔の叫びを聞いたのであった。あたりはあまりにも静かであった。ただ弥兵衛の歩く足と道の草とが触れあう音が規則的にそこにあり、高く風が鳴っているだけであった。にもかかわらず、弥兵衛は再度にわたって耳元に弥助の断末魔の叫びを聞いたのであった。弥兵衛は身を震わせた。

どれくらい歩いただろうか。弥兵衛はいつしか自分の背中にべっとりと汗をかいているのを覚えた。暑さはなかった。いや、荒涼たる田畑のうえを吹き抜ける風の冷たさはもはや冬のけしきであった。だが弥兵衛は背中に汗を感じていた。抑圧された百姓だけが感じる、もっていきようのない憤りに弥兵衛は汗していたのかも知れなかった。この怒りは、この憤りは、百姓だけが知っている。

一刀両断になんの雑作もなく、ぼろ切れのように斬り捨てられた弥助。弥兵衛はじっと堪えた。そしてやはり惰性のように歩き続けた。歩き出したら途中で止まることは許されないのだ。文句は言えないのだ。人間とはそうしたものだ。弥兵衛はそう思おうとした。唇を噛みしめながら弥兵衛は歩いた。

川の音がかすかに聞こえてきた。丸太橋が架かっている川である。幅は狭いが無闇に深くて流れは急である。流れはところどころに渦をつくってしぶきをあげていた。

闇のなかに柳の木が浮かび出てきた。流れの音が耳に近づいた。すべてが闇のなかにあって川の水が光を作り出し、柳の木の一帯がぼんやりと明るかった。

そして弥兵衛はそこにうずくまるように伏しているお園の姿を見たのであった。お園は柳の木の根元に縋りつくようにして肩を震わせていた。髪が乱れ風がそれをもてあそんでいた。柳の葉がざわめいた。弥兵衛はお園のうしろに立ってじっとその姿を見つめていた。

「人間、どんなに苦しくても、そんなにたやすく死ねるもんではねえだ」

弥兵衛はお園を哀れむように言った。父親の声であった。

お園が、わっと声をあげて泣いた。震える肩口が痛々しかった。これまでのすべての思いを一気に吐きだすような声であった。弥兵衛はその姿をじっと見ていた。

ただここにこういう光景がある。弥兵衛は自分にそう思い込ませようとした。怒りをもつことを許されない百姓はこうした光景にも無感動でなくてはならないのか。

「そうか。だが、本当にそうなのか」

悲しみの渕にいるお園の姿を見入りながら、弥兵衛はうめくように呟いた。

暗黒の空にひときわ激しく風は吹き荒れた。

（おわり）